東京都市大学共通教育部紀要　抜刷　2018 Vol.11

A Historical Study of the Bildungsroman and the Beginning of the Modernism Literature

教養小説の歴史的考察とモダニズム文学の始まり

秋山 義典

Journal of Liberal Arts and Sciences at Tokyo City University Vol.11, 2018

教養小説の歴史的考察とモダニズム文学の始まり

外国語共通教育センター　　秋山 義典

1.　モダニズムと教養小説(Bildungsroman)

本論では、古典教養小説とモダニズム小説の関係について考察したいと思う。モダニズム文学が、教養小説というジャンルとどのような関係があったのか。18 世紀に登場したと言われるこのジャンルが、その後の時代を経てどのような展開を見せたのだろうか。この設問には、教養小説というジャンルにまつわる複雑な背景があると言われる。かつては、多くの読者に支えられた教養小説の影響力が、20 世紀に入っても同じように多くの読者を魅了したのだろうか。教養小説をめぐるその時代の長い変遷に不都合な時代背景があったのではないだろうか。主人公の人間形成を主題にした小説が存在理由を維持可能だったのか。もしかすると 20 世紀のモダニズム文学にとって、この教養小説の形式はすでに使い尽くされた過去の文学遺産であると考えられているのかもしれない。ヨーロッパの教養小説の伝統には盛衰がある点を指摘した Marc Redfield『Phantom Formation』(1996) によれば、20 世紀文学から見ると、教養小説とは "a phantom (幻影)" になってしまったといわれる。Redfield によれば、もしかするとモダニズム文学との関係について考察すると古典教養小説の魅力はすっかり失われてしまっているのもしれない。それではモダニズム小説の主人公にとって自己形成 (Bildung) の概念と共通点はあるのか。あるいはモダニスト小説にとって教養小説 (Bildungsroman) の機能が古典的教養小説の伝統と似たような人間像を形成することが同様に語られているのであろうか。

2.　教養小説とBildung

「教養小説」とはそもそもどこから来たものなのか、その起源について、Gregory Castle は『Reading the Modernist Bildungsroman』(2006) の中で次のように語っている。文学のジャンルとして、教養小説が独特な理由は、歴史的なある時期とこの文学ジャンルと切り離すことができないくらい密接な結びつきがあるという。この教養小説の由来をたどるとそれは、まず Self-cultivation（自己鍛錬）または Bildung（形成）という考え方が、18 世紀前半のドイツでまず取り上げられたことが考えられる。それは 18 世紀後半のことであった。この概念をそもそも着想したのが、ワイマールの知識人たちで、フリードリヒ・フォン・シラーとヨハン・ウォルフガング・ゲーテ、さらにプロシアの哲学者フンボルトである。この Bildung とは啓蒙思想の産物であり、人間の理性、進歩、発達における個人的自由を重視している。このような啓蒙主義に影響を受けたドイツの知識人がこの Bildung を重要な精神的な企てとして考えるようになった。この知識層は、個人が自己鍛錬を展開することで、人間主体が内面的かつ相互的に人格の調和を創造することができるようになると言われるようになった。代表作にはゲーテの『ウィルヘルム・マイスターの修行時代』（1795）がある。それは、教養小説の原型として取り上げられる。

教養小説（Bildungsroman）の概念が最初につかわれたのは 1810 年ごろでドイツのカール・モルゲンシュテルンであった。1819 年と 1820 年のかれの講義でこのジャンルが成長の最初の段階から成長の完成に向けて若い主人公の成長を表現するとき、この言葉が使用されるようになった。しかしながら、この用語が広がりを見せるのは、ディルタイが『経験と詩』（1906）でゲーテの『ウィルヘルム・マイスターの修行時代』（1795）に言及したときからといわれている。

『ウィルヘルム・マイスターの修業時代』では若きウィルヘルムがハムレット劇に参加することで、開眼する。かれの社会化のプロセスとして、演劇に参加した彼は、劇場の体験、演劇的な身振りなどの体験が触媒の役割を果たしながら、自己形成されていく主体をつくりあげている。Thomas L. Jeffers の『Apprenticeships』（2005）中でウィルヘルムが自己形成の時間のなかで獲得するのがこのように説明されている “his sexual partners, his aesthetic interests, his career and companions, all with a view to giving his life the shape that pleases …

himself.”[*1] こうした形成時期を通じて、「塔の結社」から励まされてウィルヘルムは生きる勇気を与えられて、新たに自己成長を体験することができた。かれは他人のために、社会に仕える決心を固めようとする。やがて良き市民となり、市民社会のなかの自己を完結させることに近づくことが可能になった。ウィルヘルムは女優マリアーネが残した子供フェーリックスが最後に自分の子供とわかる。そういう確信を持つことができた主人公は、フェーリックスを育てあげる決意を決める。ジェルジ・ルカーチ『小説の理論』(1920)では、特に『ウィルヘルム・マイスターの修行時代』に代表的な教養小説的な位置を与えられている。この教養小説は若い芸術家が自己表現を探求する苦闘であり、最終的に社会の中で、ウィルヘルムは自己の居場所を見出すことができる。『ウィルヘルム・マイスター』の教養小説の機能は若い主人公にとっての個人の成長手段とその有機的な人間像を表現していると指摘する。ルカーチの分析によれば、そこに主人公が社会の探求を実践して成熟した社会的な役割を達成することができるといわれる。

3. イギリス教養小説の背景

教養小説の特徴には若い主人公の主体における自己育成、自己修練の重要性があげられる。さらに教養小説の登場人物は、自己の明白な目標を達成しようと、こうした自己育成の使命に打ち込んで見せる。その幼年時代は、混沌した統一感のとれない時期を送りながら、その主人公は冷酷な社会であるにもかかわらず、世界と自分の精神との一体感を打ち立てることができる。やがて、かれは成熟した大人に成長する。その時、自分が何者であるのかを認識した賢明さをもち合わせた人格となる。

教養小説の伝統を分析した古典的名著『Season of Youth』(1974) の Jerome Hamilton Buckley によれば、教養小説とは、その純粋な形式において、自己鍛錬あるいは多方面の成長の小説と呼ばれる。Buckley は、典型的な教養小説を次のように述べている。

> A child of some sensibility grows up in the country or in a provincial town, where he finds constraints, social and intellectual, placed upon the free imagination. His family, especially his father, proves doggedly hostile

to his ambitions, and quite impervious to the new ideas he has gained from unprescribed reading. His first schooling, even if not totally inadequate, may be frustrating insofar as it may suggest options not available to him in his present setting. He therefore, sometimes at a quite early age, leaves the repressive atmosphere of home (and the relative innocence), to make his way independently in the city (in the English novels, usually London). There his real `education` begins, not only his preparation for a career but also---and often more importantly—his direct experience of urban life.*2

教養小説の登場人物は、地方に暮らす若者で、保守的な考えの家族との対立を抱えて悩み苦しむ。この主人公の若者が受けた教養が十分でなく満たされた状況ではない。かれは抱く芸術家的創造力やジェントルマンになりたい野心を内面で強く抱くが、自己展開の願望が押さえつけられてしまう。周囲の環境とは調和できないそういう苦しい状況に置かれている。ある時点でかれは本当の教育が受けられる都市に出かけていく決心をつける。Buckley によれば、ロンドンが都会としてよく登場するといわれる。主人公にとって都市の存在は、重要な位置を占める。都市は地方の出の若者にとってポジティブな解放の空間になる。地元では実現できないような自分にふさわしい自己展開のチャンスになるかもしれない。人生の拡張された時期にいろいろな試みを行い、社会や家族に反逆して、彼にとっての本当の教育的な経験を経て、家族や既成概念の価値観の拘束から解放されようと淡い期待に胸を躍らせる。主人公にとって自分が何者であるのか、自分が望むものが何かをという収集のつかない考えを解決しようとするのである。Buckley は伝統的な教養小説のプロットであればここで引用した内容からこのジャンルに特徴的な具体的な主題に落とし込むことが可能であるという。

歴史的にみると、フランス革命によって影響されたヨーロッパの社会動乱と不安の 1830 年～40 年代には英国社会でも社会的な不安や苦しみを経験した。しかしながら、その後の 1850 年頃から 75 年頃のヴィクトリア朝全盛期には、一時的にイギリスには比較的落ち着いた平和な時期が訪れたと言われる。1848 年には労働者階級を中心になされた成人男子の普通選挙権を要求するチャーティスト運動が顕著な高まりを見せた時代であり、社会に繁栄に向かいつつある傾向を見ることができる。こうした背景に英国での個人の成長を歴史的に物語にする関

心が生まれつつあったとみられる。

イギリスでは1850年代ごろに主人公の人間形成をテーマにした一連の小説が登場する。若い主人公が様々な試練に耐えて精神的な成長を経験した後、自己の確立に至る。チャールズ・ディケンズ『デイヴッド・カッパフィールド』(1850)、ジョージ・メレディス『リチャード・フェヴェレルの試練』(1859)、ジョージ・エリオット『フロス河畔の水車場』(1860)ジョージ・ムーア『青年の告白』(1880)など代表作にあげることができる。ドイツの啓蒙思想の理想から、この教養小説は、19世紀半ばから進化し続けるが、特に19世紀の英国の教養小説では、個人の主体が人間の個人的な過去を重視し、過去から現在への時間の経過の中で成長するストーリーが多く書かれることになる。自己の精神的な自伝が試みられているのが特徴である。作家の自伝的な要素も強く、作家が自分の若い時代を振りかえり、加えて、個人が周囲の社会環境の文脈のなかでどのようにかかわるのかという点が特徴とされる。Jeffersは英国の教養小説では次のように語る。"his social milieu is part of him. Intersubjectivity—life with, for, and through other people—is an inextinguishable determinant of his identity… the question of his responsibility to them isn't sidestepped."*3 社会とのつながりという点からみると、イギリス教養小説の人物には社会(都会)との接点が重要な視点になる。したがって、(芸術家的)登場人物と社会の関係が相互に有益であることを教えてくれる。若い芸術家的な主人公にとって、家族や自分の故郷を捨てることで、自分の鋭い感受性を優先させる。社会や彼の周辺の環境は彼の独特の芸術家的な資質を十分に理解しようとしない。家族との離脱の次にやってくるのが、恋愛による自己展開であろう。

4. フランコ・モレッティの「教養小説」説

『The Way of the World』(1987)のフランコ・モレッティにとって(古典)教養小説とは、完璧な結婚で終わる物語であるという。ゲーテの『ウィルヘルム・マイスター』とジェーン・オースティンの『傲慢と偏見』を取り上げて論じている。若い主人公の結婚とは、個人の自由と社会の制約の間に生まれる妥協を短く要約したものであるという。古典的な教養小説とは必ず結婚で締めくくられると指摘する。個人の自由と社会の制約の摩擦は、まさに教養小説そのものであ

るとモレッティはいう。彼の説によれば、この教養小説というジャンルが近代社会のトラウマから発生しているという。この近代社会とは、「若さ」が近代性と変革の象徴的な存在になった。若さとは新しい世界である。それはまさにフランス革命を称揚するようなヨーロッパ世界の近代性というものである。若さから成熟への発展を詳しく調べてみると、こうした若さの社会的動乱にある世界は混乱を経験した。若い主人公は自由を求めて、これまでの社会秩序を変革しようと動き出した。こうした混乱に秩序をもたらすことができたのがこの教養小説の役割であるとモレッティは考える。つまり、個人の自由と社会の秩序という潜在的に対立する理念を統合することによって、急増する中産階級の読者の不安を落ち着かせる機能が、暗黙裡に求められていたのである。さらに、仕事探しのみならず、ふさわしい結婚相手を探し出すことで、安定した成熟した大人の主体を獲得することも、同時に大きな意味を持つ。その点から、古典教養小説では独身貴族を続けて、個人の自由で人生を送ることにはあまり意味を持たない。女性は家庭の中で生産する心づもりがあるのかが求められていると言える。総じて、教養小説では、動乱と不安を鎮める必要から他者と社会との調和のとれた関係のなかであるいはひとつの国家体制の範囲で自己主体の成長と国家の発展の調和を達成する点に重要性が生まれる。そういう西洋混乱期の危機に、教養小説が秩序と平穏をもたらすことができたのではないかというモレッティの考察である。

5. 古典教養小説からモダニズム文学へ

ドイツ生まれの教養小説が英国の教養小説に受け継がれるときに、共通している概念は、主体の統一感というべき内容である。Gregory Castle によれば、その主体の統一感が目指す共通点とは “the harmony of one’s intellectual, moral, spiritual, and artistic faculties,” and “harmony of self and society” *4 という特徴があげられる。したがって、教養小説の登場人物は精神的な一貫性と自己という確実な意識を探求する使命を帯びていると言える。

しかしながら、20 世紀に入ろうとするころ、モダニズム文学の台頭とともに伝統的な教養小説の物語がひっくり返されようとしているのである。“elements that demanded stability and predictable development in the classic Bildungsroman—harmonious identity- formation, aesthetic education, meaningful

and rewarding social relations, a vocation—become problematic in the 20th century." *5 キャッスルが特徴に上げる教養小説の主人公にとって、調和のとれた自己形成、美的教養、有意義な社会関係、確実な職業を大きな意味を持っていたが、その価値観が覆されるのが、20 世紀のモダニズム的事象であると指摘される。その点から、見ると、モダニズムの教養小説とは、本来の教養小説が備えていた特徴が 20 世紀には矛盾をしてくることである。モダニズムの教養小説には次のような特徴が考えられる。

1. 社会と自己の調和した関係を達成不可能ゆえにモダニズム小説の主人公が自己意識を明白に抑圧すること
2. 芸術家的な若い主人公にとっての社会関係の変化：芸術と社会との関係が一致しなくなる。
3. 古典教養小説によって称賛された世界の工業化と実用化の肯定へのモダニスト作家の心理的な抵抗
4. 自己と世界の同一化の不連続化、自己と社会の予定調和の崩壊

伝統的な教養小説では、時間とともに生成される過程にある具体的な人間像が展開される。よく言われる「統一された主体性」(Unified Subjectivity) が確実に形成されていく。まさに人間にとっての自己形成が完成されようとする物語が教養小説の重要な要素となると考えられる。ディケンズ『デイビッド・カッパフィールド』(1850) の例をあげれば、若い主人公デイビッドは誕生して結婚までの時間の過程で、無色の主人公の意識が、ある時は、暖かい愛情を受け、ある時は思いがけない友情を受けたときに、初期の成長段階から確実に次の成長へと自己形成されている教養小説のテーマがはっきりと見ることができると思われる。

一方、ジェイムズ・ジョイスの『若い芸術家の肖像』(1916) では、外的世界のリアリティはスティーブン・ディーダラスの意識を通じてのみ語られる。スティーブンの自意識こそが、外的環境の現実なのである。この若い主人公の心理的な認識が世界の絶対性を強力に表現している点が特徴である。モダニズムによる教養小説を特徴づける芸術的主体と（アイルランド）社会を結ぶ同一性が必ずしも安定しない。その関係は揺らいでいる。スティーブンが伝えようする過剰な自己意識が、生即ち芸術である様式に基づいて、芸術的な自己主体を表現する。

例えば、国家（国籍）に対しては「エグザイル」という方法で対処する。言葉に対しては「沈黙」で対処する。前者は後者によって否定される。前者に対峙する後者を打ち立てることで、従来の調和のとれた人間像の同一性に内在的な批判が加えられる。主人公の主体には統一感のない複数の自己（主体性）が存在しているのが確認できると思われる。それは確立した文学ジャンルの伝統に対するモダニズム教養小説による抵抗感を表現しているともいえる。芸術家としての厳しい自己鍛錬を追求しつつも、ジョイスのスティーブンが、従来のこの文学ジャンルの先駆者が実践したような自己と社会の統一感を達成目標として据えることに抵抗を禁じえない。伝統的な教養小説で描かれた「完璧に成長した」自己の概念は啓蒙時代の進歩の観念ともに理念を共有していたはずだったが、モダニストたちは、人間をより複雑に認識する新しい知の枠組みの中で登場人物の成長の難しさを描いている。世界の中で自己実現欲求を満たすことが可能であった 18 世紀後半からの古典教養小説の主人公と凍結停止された成長に象徴されるモダニズム小説の主人公との間には大きな隔たりが生じている。文学を取り囲む世界のシステムが変化している。個人の成長について、大きな隔たりが生まれた。モダニズムにおける教養小説の変化を論じた Jed Esty『Unseasonable Youth』（2012）では教養小説が国家的な参照枠からグローバルな参照枠へと転移していると指摘する。

> If Balzac, Tolstoy, and Scott capture the concrete crises of emergent nationhood in the world-system of the nineteenth century, then Conrad, Joyce, and Woolf capture the concrete crises of residual nationhood in the world-system of the twentieth. From this perspective, it is possible to argue that the bourgeois novel of the modernist period finally (belatedly) transfers the narrative of uneven modernization from a national frame of reference to a global one, diminishing in the process the operative symbolic power of Lukacsian or liberal norms of universal progress. In the specific form of the metabildungsroman(mixing antidevelopmental and developmental narrative units), the modernist novel encodes the objective conditions of a world-system based on endless capitalist innovation yet still informed and legitimated by a now-fragile ideology of developmental

historicism…Modernist novels of unseasonable youth project the narrative of modernization understood as constant revolution without or despite the symbolic backstop of national tradition.*6

19世紀のトルストイやバルザックは、当時の世界システムの具体的危機を機敏にとらえていたはずである。そうであれば、20世紀のコンラッドやジョイス、ウルフたちも同様に20世紀初頭の彼らを取り巻く資本主義の国家体制の変化を鋭く感じ取っていたことであろう。そうした変化に対応した結果として、モダニストは、メタ教養小説あるいは成長否定の物語を発明することになった。時代に即した世界のシステムにしたがって、モダニズムにおける中産階級の小説に変革をもたらし、閉ざされたナショナルな枠から複数のグローバルな枠に転移させることで安定ならざる近代化の物語群を開発したのだと考察することは可能であろう。モダニズムにおける物語は強固な国家伝統に左右されずに絶えず読み替えられる物語として理解されるべきであろうと読み解くことができるだろう。

6. 教養小説の試練の4パタン

教養小説では主人公が経験する障壁というべき試練がある。宗教における祭儀のように、それは主人公が入門しなければいけない一種のイニシエーションと呼べる象徴的な形式である。それは4種類に分類される。これらの障壁が主人公の自己形成を促し、その障壁をいかに克服して、あるいはそれに立ち向かうのかという点が成長の印になるはずである。

1. 人種・階級に於ける障害

自伝的な要素が強い点も教養小説の特徴の一つにあげられるだろう。その中でも、モダニズム後期に登場するジーン・リース『闇の中の航海』(1934)における女性主人公アナがそれに相当するかもしれない。西インド諸島の英国植民地に生まれた女性である。父親はウェールズ人の医者であり、母親はクレオールである。西インド諸島ドミニカの生活が暖かい太陽の光に包まれた記憶を懐かしく思い出し、英国の都市、ロンドンの片隅に自分が生きる意味を見つけられないまま、旧植民地生まれの主体と英国人であることのアイデンティティの間で深

く悩み苦しむ。アナの自己同一性の揺らぎが彼女の人間形成に暗い影を投げかける。アナを経済的に支援してきたイギリス人男性ウォルターが、クレオール出身のアナに最終的には別れを告げる。アナの人生は、人種的な差異、経済的な格差の現実に巻き込まれる。やがて、人生の苦しい挫折を味わう。アナは、不幸な事件の連続で、最後は自己形成の契機をつかめないまま、孤独の中で、成長のチャンスを得ることなく、この世を去る。

若い主人公の自己形成が人種的な差異の中で確立の苦悩を体験することになる。

2. 恋愛・結婚に於ける障害

若い男性が教養小説の主人公になる場合には、恋愛の経験が忍耐力の度合いを高めることに結びつく。この経験を彼の孤独感を癒し、成長を方向付ける絶好の機会になりうる。主人公が美を探求する芸術家の場合、美の観念は魅惑的であるがゆえにその行方は自己形成には愚かしくもあり、危険な追求行為である。この場合、この美の追求が自分の本来の仕事を離れて、幸福を追求することに向かう。同時に芸術家の美の探求は、結局、女性の美（愛）を求める行為に知らず知らずのうちに置換されていることに気が付かされる。ヘンリー・ジェイムズ『ロデリック・ハドソン』（1875）の主人公が怪しい美貌の持ち主、クリスティーナに彼女の胸像を作らせてほしいと打ち明ける。そのとき、ロデリックは、芸術に打ち込むことで、願望の対象を獲得することに精神的に同一化させている。しかしながら、望ましいものを妨げる障害が発生することで、彼の心理的抑圧が生まれる。この抑圧から解放されることで、彼はさらなる芸術家の探求に突き進む。この恋愛によって主人公は悲劇的な運命に向かっていく。他方、フィッツジェラルド『グレート・ギャッビー』（1925）のデイジーは、ギャッビーが嘗て貧しい少尉のころにあこがれの対象であった。第一次世界大戦でヨーロッパに出征していたギャッビーはデイジーが大金持ちのトムと結婚していたことを知る。お金が彼女のこころをとらえたのだと思い込む。デイジーの屋敷に向かい合う場所に大邸宅を買い取り、彼女の関心をひき、愛をとりかえそうと自己の幸福を求める。しかし、この意図は結婚の成就には結びつかない。主人公の自己実現が中途半端な位置にとどまり、その願望は後退を余儀なくされる。

3.　財産（富）に於ける障害

産業革命を経た英国北部では、最初の鉄製軌道が敷かれ、河口や海峡には定期蒸気船が通い始めた。人口は著しく増大し、児童や青年の占める割合が増加した。新しい社会の成長は、英国人の健康や生活様式に影響を与えている。農村に生まれ、農村に育った男女が工場における労働力となり、それと同時に、新しい原料源が開発され、新しい市場が開かれるようになった。資本の量も、その流動性も増大し、銀行制度が誕生した。革新と進歩の思想が、英国の社会の在り方を変えた。人々は過去よりもむしろ未来に眼を注ぐようになり、社会生活に関する彼等の考え方も変化した。具体的には、富を得ることで、ジェントルマンになることが人生の目的となり、そこに中産階級的な価値観が形成される。ワイルド『ドリアン・グレイの肖像』（1891）では、フランスの作家ユイスマンスの『さかしま』で見られたアジアの異国趣味の消費活動も見て取れる。ドリアンは、ロンドンという都市のなかで帝国主義的な消費活動に強い興味をしめす。ドリアンが香水の香りに魅了されるが、その異国情緒が喚起されるのを思い出す。帝国の都市ならではの新しい商品へのあくなき欲望、喜び、美しさを所有する。新たな消費活動が都市ならではの富の蓄積を暗示している。他方、アメリカでは１８６０年代に南北戦争によって、北部の勝利で終わったことにより、本格的な産業革命が展開される。広大な国土と資源に恵まれ、特に東海岸や五大湖地方の工業地帯が急速に発展して、鉄道建設は１８６９年に大陸横断鉄道が完成し、ロックフェラーによる石油産業、カーネギーによる製鉄業など、米国の工業化はピークを迎える。またその労働力として、はじめヨーロッパからから大量の移民が移住し、多民族国家アメリカ合衆国を形成することとなった。反面、大都会では金銭的利益を追求する風潮が強くなり、「金ぴか時代」といわれた。このように社会が産業化を進展させた結果、『グレート・ギャッビー』（1900）の東部のニューヨークを始め、ドライサーの『シスター・キャリー』（1900）の中西部シカゴ、西部のサンフランシスコ、ロサンジェルスなどの大都市が出現した。

フィッツジェラルド『グレート・ギャッビー』では、小説のなかでみられる広告活動、商品の流動化など登場人物たちの歴史観が揺り動かされているのが読み取れる。日常生活の中に大量の物質が消費され、主人公は豊富な物質空間の中で自己の幸福を追求する。さらにシオドア・ドライサー『シスター・キャリー』では目を奪うばかりの大都市シカゴでキャリーは働いて稼いで収入を徐々に増や

していく一方で、対象的に、社会の変化に対応できずに、仕事を追われて、財産を食いつぶしていくハーストウッドの姿は、伝統的な男女の相違を超えて、米国の新しい社会の変化を示している。流行のライフスタイルや身なりを手に入れるためにお金を獲得して豊かな富を追求する新しい女性の主人公キャリーの登場も特徴的である。

4.　国家における障害

古典的な教養小説は、19世紀のウォルター・スコットやジェーン・オースティンの時代、あるいはゲーテやスタンダールの時代には中産階級が成長して大人へと成熟していく様子が社会的な象徴としての物語になった。教養小説の主人公はその国家を背景に有機的な自己形成を展開することが可能であった。大人に成長することと国家成長が共通の象徴でもあった。自己形成と社会変革がともに展開する。

世界の制度がヨーロッパを中心にした安定した世界観の中で、若い主人公は、ルカーチが述べているような理想的な成長の有機体を形成することが望まれて、その期待に応えて自己形成の論理を展開する。ヨーロッパの産業革命が展開して、資本主義経済が徐々に従来のナショナルな国家観から、インターナショナルな国家関係に変わりつつあった。19世紀後半になると、こうした国家の領域が、同じ世界のなかに収まることが難しくなってくる。教養小説の主人公はドイツ18世紀の啓蒙期の理想であった「自由な十全な成長」を保障されていたが、資本主義のモダニティが主人公の統一された主体性と国家的な成長のアレゴリーに大きな制約をもたらす結果を生んだ。つまり、古典教養小説では国内的な自己形成であったテーマに大きな変換が迫られた。

安定した世界の調和は、高度な資本消費主義、市場経済の国際化、植民地帝国主義、第一次世界大戦の勃発により、一気に不安定な状況に陥ったのである。ジョイス『若い芸術家の肖像』の若い芸術家スティーブンはアイルランドという国籍に「エグザイル」という選択で自己確立を目指そうとする。ヴァージニア・ウルフ『ジェイコブの部屋』(1922) では、第一次世界大戦の抵抗を暗示する国家が主人公のジェイコブを囲い込んでしまい、語り手がジェイコブの自己形成の印が意図的に隠蔽されてしまう。実体に迫ることが難しくなり、主人公の曖昧な成長状況を途切れ途切れに伝えている。古典教養小説では自己形成はほぼ確実

に制度化されていたわけであったが、ウルフはそういう明白な調和のとれた自己同一化への精神的な抵抗を示そうとしたと見ることができる。

後期モダニズムのジーン・リース『闇の中の航海』では白人クレオール出身のアナがドミニカと英国、植民地と大都市の分離の中で複数の主体性をサバイバルのために使い分ける。その姿に成長したくても、自己形成が押さえつけられてしまう植民地的主体の悲劇が顕在化している。

このように以上のような分類コードから考察することで、古典教養小説の統一された西洋世界における自己形成からこの成長過程の崩壊・凍結をこの教養小説の歴史的な展開の中にたどることができると思われる。

註

＊1　Thomas L.Jeffers, Apprenticeships (NewYork:Palgrave Macmillan,2005),p.28.

＊2　Jerome Hamilton Buckley, Seasons of Youth (Replica Book,1974,2002), p.18.

＊3　Jeffers, p.36.

＊4　Gregory Castle, Reading the Modernist Bildungsroman (Gainesville: University Press of Florida,2006), p.7.

＊5　Castle, p.24.

＊6　Jed Esty, Unseasonable Youth (New York: Oxford University Press,2012), pp.38-39.